

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520295

研究課題名 (和文) 日仏名詞限定表現の対照研究

研究課題名 (英文) Studies on the determiners in Japanese and in French

研究代表者

坂原 茂 (SAKAHARA SHIGERU)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40153902

研究成果の概要：名詞句の談話処理モデルに基づき、フランス語と日本語の名詞限定表現の対応の詳細を研究し、日本人フランス語学習者にとりフランス語限定表現の習得がなぜ難しいかを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：日本語、フランス語、限定表現、定冠詞、メンタル・スペース理論

1. 研究開始当初の背景

(1) 坂原は、ジル・フォコニエ『メンタル・スペース - 自然言語理解の認知インターフェイス』を翻訳刊行する過程で、詳細な解説を書き、名詞句研究が将来進むべき方向を指摘した。その後、このプランに沿って、1991年「フランス語と日本語の限定表現の対応」を発表した。ついで、この研究をさらに広げ、1997年「名詞句解釈の多様性と変化述語」を経て、科研報告書を手直して2000年「英語と日本語

の名詞句限定表現の対応関係」で一応の完成を見た。しかしながら、細部に関して、いまだやり残した点があり、従来成果を踏まえた上で、さらに統一的・包括的な名詞句研究を押し進める必要があった。

(2) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻は、対照研究の場としてはいくつかの有利な点がある。外国人スタッフを含めて、さまざまな言語の専門家がおり、対照言語研究にきわめて有利な環境が整備

されている。さらに、院生にも、さまざまな言語の母語話者で、本人も言語研究者であり、言語研究の意義を理解し、共有できるインフォーマントに事欠かない。こうした恵まれた環境を十分利用すれば、日本語とフランス語との対照研究を越えて、さらに広範囲の有意義な対照研究を遂行できる見込みがあった。

2. 研究の目的

(1) 名詞句の機能を背景で支える知識ベースに目を向け、それぞれの名詞句が知識ベースとどのような関連をもつかを考え、包括的な名詞句理解のモデル(談話処理モデルと呼ぶ) を構築する。

(2) 談話処理モデルに基づき日本語とフランス語の名詞限定表現の全体的対応と、特に日本語裸名詞句とフランス語定冠詞句の対応の詳細とを明らかにする。

(3) 日本人のフランス語学習者にとり、なぜ定冠詞句の用法の習得が困難かを明らかにし、フランス語学習を容易にする。

3. 研究の方法

(1) 従来の名詞限定表現の代表的研究を収集・整理・分析し、長所・問題点を検討し、本研究での方法論を明確にする。

(2) 従来の研究で明らかになった事実を整理し、未解決または研究不足の問題をつきつめる。

(3) 名詞限定表現のデータを広く採集し、問題・重要性に応じて分類整理し、採集された言語データをデータベース化する。

(4) データに理論的な分析を施し、包括的で応用範囲の広い理論化を行う。

4. 研究成果

(1) フランス語と日本語の名詞句の大きな違

いは、冠詞のある、なしである。この違いが名詞句の使用や、その意味論に及ぼす影響は非常に大きく、また、それがフランス語の習得を困難にしている。ところが、これまでの冠詞論では、冠詞は、他の名詞限定表現(指示詞、所有形容詞など) と切り放して研究されることが多かった。しかし、この方法では日本語の名詞句使用と比較することはできず、結局のところ、名詞句全体の意味の違いを十分に明らかにすることはできない。フランス語と日本語の名詞句使用の違いを明確に理論化するには、名詞句の限定表現のシステム全体を考察する研究と、さらにその上の言語使用全体についての理論が必要である。

本研究では、定冠詞で限定されたフランス語名詞句(定冠詞句と呼ぶ) と限定表現がなくともつかない日本語名詞句(裸名詞と呼ぶ) との著しい用法の類似を、名詞句の談話処理モデルにもとづき、説明を与えることができた。この説明には、日本語とフランス語の名詞句全体の用法を視野に入れ、ある特定の名詞句がそのどの用法を担っているかを明らかにした。さらに、名詞句の機能を背景で支える知識ベースに目を向け、それぞれの名詞句が知識ベースとどのような関連をもつかを考え、包括的な名詞句理解のモデルを構築した。このような考え方からすると、裸名詞と定冠詞句の類似は、それぞれの言語で、同定すべき指示対象のカテゴリーを指定しながら、その同定方法は指定しない同定表現の必然的な行動パターンとして説明できた。

(2) 従来の名詞句の指示性に関する研究は、個別的過ぎたり、単なる事実の指摘に終わることが多かった。本研究は、こうした限界を越え、名詞句使用の包括的な理論を構築する。このためまず新聞、論文、文学作品、会話などから広く言語データを集めるとともに、フランス人を使ってインフォーマントチェック

を集中的に行うことで、質の高いデータを集め、このデータに理論的分析し、理論化を進めた。

自然言語による情報伝達の特徴に目を向けると、自然言語の情報伝達は、参加者が共有している高度に構造化された知識ベース（意味ネットワーク、フレーム、スクリプト、理想認知モデルなど）に基づき行なわれる。言語使用に対する、こうした全体的パースペクティブの中で、名詞句意味の問題を考えると、フランス語と異なり冠詞の存在しない日本語で、名詞句の意味がどのように特定化されているかを考えることは、冠詞のシステムの理解に非常に有効であった。

本研究は、自然言語理解が持つ語用論的性格を踏まえた上で、名詞句全般の意味論、特に定冠詞の問題を、冠詞がなく、指示詞の体系も異なる日本語と比較対照しながら考えた。フランス語定冠詞句と日本語裸名詞の間の著しい類似性は、定冠詞句と裸名詞という意味の違いを越えて、名詞句が全体として行わなければならない、機能の再配分として説明できることを明らかにした。

(3) フランス語教育の分野で現在流布している冠詞を含めた名詞限定詞の教育システムは一貫性がなく、理論化が痛感される。このためにも、フランス語と日本語の名詞句のシステムの違いを体系的に研究し明らかにしなければならない。本研究では、理論的な研究成果はフランス語教育への応用を図り、冠詞の用法の習得を円滑化にする方法を考えた。

(4) 研究成果は、論文7つからなる研究成果報告書として2009年2月に刊行し、配布した。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

坂原茂. 2008. Dynamism of Category Reorganization in Tautology. Shin-mei Kao and Shelley Ching-yu Hsieh (eds.). *Languages across Cultures*. NCKU FLLD Monograph Series 1. Foreign Language and Literature Department, National Cheng Kung University, Taiwan. pp.205-221. 査読あり

坂原茂. 2007. 認知と語用論のインターフェイス. 『言語』. Vol.36.No.12. 特集. 語用論の新展開. コンテキストに埋もれた意味の解明. 大修館書店. pp24-31. 査読なし.

坂原茂. 2006. 名詞句の探索領域: 日本語裸名詞と英語定冠詞句の類似性. 『日本語文法学会第7回大会発表予稿集』. 33-42. 査読あり.

[学会発表](計 12 件)

坂原茂. 2008. Motion verbs and the expression of secondary aspects: The case of the complex verbs with 'kuru'(come) in Japanese. Space-Time Mapping Workshop. 8-9 November 2009. University of Tokyo.

坂原茂. 2008. アスペクト表示の複合動詞「V て来る」と空間時間メタファ. 文法学会. 2008年7月12日. 東京大学.

坂原茂. 2008. 条件文と因果関係ネットワーク. 招待講演. シンポジウム『日本語の条件表現一体系と多様性をめぐって』. 日本語学会. 2008年5月17日. 日本大学.

坂原茂. 2008. A case of an exceptional causative construction in French and the

Rescue Principle. 招待講演. Oxford-Kobe Linguistic Seminar "The History and Structure of the Romance Languages" 31 March - 3 April 2008

坂原茂. 2007. Causal network underlying interpretations of conditionals, concessives and causals. Conditionals Workshop. 6-8 October 2007. University of Tokyo.

坂原茂. 2007. Antecedent-internal WH-phrases. Conditionals Workshop. 6-8 October 2007. University of Tokyo.

坂原茂. 2007. Motion verbs and the expression of secondary aspects: Blending in the case of the complex verbs with 'kuru'(come) in Japanese. ICLC2007. 15-20 July 15-20. Krakow, Poland

坂原茂. 2007. 疑似条件文について. 招待講演. 2007年5月31日. 南台科技大学. 台南市・台湾.

坂原茂. 2007. Dynamism of Category Reorganization in Tautology. 招待講演. Keynote speech. MDALL(Multi Development and Application of Language and Linguistics.2007 語言多元化發展及応用国際研討会). 31 May 2007. 国立成功大学 (National Chen-Kun University). 台南市・台湾.

坂原茂. 2006. 名詞句の探索領域：日本語裸名詞と英語定冠詞句の類似性. 招待講演. 日本語文法学会第7回大会. 2006年10月28-29日. 神戸大学.

坂原茂. 2006. トートロジとカテゴリ再構成のダイナミズム. 招待講演. KLS 第31回

大会. 2006年6月10-11日. 甲南大学.

坂原茂. 2006. 認知言語学の歴史的背景と考え方の特徴. 招待講演. ワークショップ「認知言語学の学び方3」. 2006年5月6日. 東京大学.

〔図書〕(計 1 件)

坂原茂. 2007. 『日常言語の推論』. コレクション認知科学4. 220p. 東京大学出版会.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂原 茂 (SAKAHARA SHIGERU)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40153902

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者